

翻刻

## 市立米沢図書館蔵『蝦夷恵曾谷日誌』について（三）

山本 淳

本稿は、標記の書『蝦夷恵曾谷日誌』（外題）の全文につき、第一、第二に次いで、第三巻を翻刻するものである。同書は、市立米沢図書館「高橋しん家寄贈文書七」として収蔵され、同図書館デジタルライブラリ (<http://www.library.yonezawa.yamagata.jp/dg/F0007.html>) にて、公開もされている。重複を厭わずに、書誌情報等を以下に示す。

- 巻数 三巻一冊（写本・原著）
  - 著筆者 濱崎八百壽（木麟・春濑とも） 米沢藩絵図方
  - 成立 明治三（1870）年
  - 体裁 縦 縦帳
  - 寸法 24.5×16.2種（縦×横）
  - 丁数 97丁
  - 蔵書印 「高橋蔵書」
  - 内容 米沢藩が支配の下命を承けた北海道の磯谷郡（現寿都町）に、藩士七名が現地調査を行った際の日誌であり、明治二年十月から翌年三月までを記録する。蝦夷地の風景や現地の習俗について説明し、自画による挿絵（彩色）を入れてある。
- 当該資料は、平成七年一月一日発行「広報よねざわ」の「郷土資料の散歩道」に紹介され、つとに小野榮氏により『よねざわ豆本第六七輯 蝦夷恵曾谷日誌』と題し、抄録として翻刻が試みられているが、

全文翻刻を旨に、第一巻を前号（『生活文化研究所報告』45）に、第二巻を『米沢女子短期大学紀要』54号に、これまで掲載した。今回は、明治三年正月朔日から、一定の任務を終えて磯谷を離れる同年三月十三日までの記録のある第三巻を翻刻する。翻刻に際して、以下の手続きに従った。

- 一 なるべく原文を忠実に翻字することを旨とした。
- 一 原文の行に即して改行することとした。当該行に収まらない場合は、改行しているところは、翻字文の当該行に余白があってもこれに倣って改行した。
- 一 細註箇所は、【】に囲んで通常ポイントで翻字した。また、細註が三行以上に亘る場合、細註の改行に合わせて改行した。
- 一 原文改頁（半丁）に合わせ、末尾に「」で区切って丁数表裏（オ、ウ）を示した。
- 一 漢字については、正字体と判断されるものについては正字体で、画数の省略が著しいものについては通行の略字体で翻字した。仮名については、基本的には変体仮名を通用仮名（歴史的仮名遣いで採用されている字体を含む）に統一した。
- 一 特殊な合字については、「より」「コト」「シテ」などと開いた。

一 特殊な繰り返し符合については、一の点を「ヽ」「ヾ」「ヽ」「ヾ」などと原態を尊重した。二の点は「々」に写した。また、クの字点は一律に「ッ」とした。

一 ルビ・傍註修正（原文朱筆）については、右ルビと左ルビとが混在するが、右ルビは当該箇所直後に右寄せで（ ）に括って小字で、左ルビは当該箇所直後に左寄せで（ ）に括って小字で示した。

一 原文中、地名には右傍線を原則としてルビ付きの場合等折々左傍線が施されているが、これを一律に右傍に施した。

一 註を要するものについては右横に「」付きで適宜施した。

本資料の姉妹篇ともいべき別筆の『惠曾谷日誌』が北海道大学附属図書館北方資料室に蔵せられているが、こちらは見分隊長の山田民弥が筆録したものである。時を同じくして成った記録であり、こちらと対照させることによって、明治初期北方地域見分の実態がより克明になるものと思われる。両筆資料的性格の差異については、拙稿「米沢藩士による蝦夷地見分日誌二種」（『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』43号・二〇一六）にて、聊か卑見を述べた。

今回も翻刻をなすにあたり、本資料御架蔵の公益財団法人米沢上杉文化振興財団、ならびに関係各位に格別な御高配を賜った。解読に際しても、本学日本史学科小林文雄教授による多大なる御教示に与った。ここに再三記して、改めて御感謝申し上げたい。

【前号（第一巻）の誤記訂正】

21 頁上段5行目（8ウ）	壱人より	〔誤〕	↓只今	〔正〕
21 頁上段6行目（8ウ）	に而月末	〔誤〕	↓に当月末	〔正〕
22 頁上段9行目（11オ）	鉄轡を	〔誤〕	↓鉄杵を	〔正〕
22 頁上段23行目（12ウ）	民家帯刀	〔誤〕	↓武家帯刀	〔正〕
22 頁下段1行目（12ウ）	無列往来	〔誤〕	↓無判往来	〔正〕
27 頁下段19行目（27ウ）	左戦場	〔誤〕	↓古戦場	〔正〕
29 頁下段12行目（33オ）	獣の首を	〔誤〕	↓諸獣の首を	〔正〕

〔翻刻部〕

三

蝦夷日誌

發磯屋

至札幌』(中扉)

〔見返白丁〕

明治三庚午正月朔日晴海波穩かなり暁天衣服を

改め互に新年を賀し恵方に向へ若水屠蘇を汲み

雑煮を食コト国に同し支配人【已後用達と改む】をはしめ運上家

【已後本陣と改む】附役人并町役百姓代年礼に出る且御支配地年

老八拾已上ものを呼出しわゐるとして目録を賜う

ノツト<sup>八十一</sup>久太郎シマコタン<sup>八十二</sup>吉右衛門ノツト<sup>八十四</sup>円次郎【秋田次

郎當時他出して目見えせず】

已下刻五島殿家来勝浦偵大橋清太郎入来酒宴

をなすかの勝浦氏地図測量方にて画號を柳<sup>リウ</sup>亭と云

寛一の門人にて漢画風なり東京邸住居之由大橋氏ハ<sup>14</sup>

肥前五島より東京<sup>江</sup>出勝浦と、もに自横濱垂墨

里加一番蒸気ヤンシル船に乗組三日三夜にて函館

渡海のよし飛脚船故斯早かりしか是より始筆

書画會をなし終日樂不尽西国端島の人北国の

はてにて出會するハ一奇と云へし当日未明より磯谷

濱中の老若悉く運上家<sup>江</sup>年礼<sup>ニ</sup>来る應接は通辞

岩藏なり【昔土人多き時分よりの

例<sup>ニ</sup>而通辞之を扱ふ】来者門口にて聲高に

「モノモ一と呼ばれハ通辞」トヲレと答ふ左すれハ入来り

扇子を開き年礼を述べ年玉として二匁位之紙包を出し<sup>14</sup>

濁酒を飲ミ大酔而帰るもおかし同二日中微雪暖にして

水不凍此日舟乗始めとて船靈<sup>江</sup>神酒を献す午後勝

浦氏<sup>江</sup>行同三日中朝雪微し降水不凍当濱辺の小兒

數十人何れも赤鉢巻赤たすきにて銀紙をもつて

鯉の形ちをつくり魚網に張つけ「エーヤホイッ」の懸聲

にて運上家<sup>江</sup>踊こみ笛太鼓あるひハ銅盤をた、き

離子立大獵<sup>江</sup>とて其賑ひいわん方なし我等も見物

いて、大獵のいわゐに一角を紙にひねりなけうてハ小兒

大に悦ひ獅子舞をなす又黒頭巾をいた、き大鯛の<sup>24</sup>

形ちを作り竿に

かけ蛭子舞<sup>蛭子</sup>とて

来るも有斯るもの

終日不絶賑ふ也

午後歌棄本陣

役人年礼<sup>江</sup>出而

夜中節分にて

豆蒔男雷の

如き聲にて「下部見開挿絵」<sup>24</sup>

福ハ内鬼は外と

門口毎に豆莖舂

程ツ、蒔散す皆

々々興を催し

彼男に何程まき

しと問へハ舊例

にて三舛ッ、蒔と

云此日吉田氏

ノツト辺の山より 「下部見開挿絵」 3㉗

虎杖を取来る大竹の如し筆筒を造るに尤佳なり

同四日中天シマコタン願翁寺年礼ニ来る同五日雪風山田

物轉并勝浦氏予三人【外土人通辞】歌棄（ラタシシ）詰開拓役人（江）年礼ニ行

已上刻歌棄運上家着支配人弥吉【此もの旧臘開拓使掌被命佐々木弥吉

と云】

出迎ひいろクク馳走す昼餉否石原権大主典宅（江）行玄関に

幕を張数挾（區）之鉄砲を飾り用人南木久吉麻上下にて取次す

間もなく案内有上段（江）通る床にハ蓬菜を飾り【蝦夷地松竹梅なし

よつて門松にハ樅（下）竹の代りに篠梅ハ作華なり】席にハ毛團美毛

氈を布き坐上（二）

石原主典傍に愛妾【久吉か娘名をなかと呼】あく辻紅粉を粧ひ衣裳】

3㉘

髪（區）の飾り極美也互に新年の祝詞を述規式畢而

大なる盃机を席の真中に置き適意に倚て汲

半酔にして藝妓来り三絃鼓をならし歌或ハ舞

松山使掌佐々木使掌畫家直堂来る【彼松山氏ハ元秋田のもの（二）而名を勇

之助と云諸国武者修行し又こむ僧となりて東京（江）出印判頭と成或ハ話

家或ハ獨樂廻し萬藝に通せしもの也 直堂ハ元加賀の者（二）て一昨年ハ

米沢仙臺

取上辺遊歴せし由其節の畫號ハ

昇齋と云米沢立町素月晨平か世話（二）成しと云【自是藝尽し（二）なり中にも

松山氏ハ獨樂廻し久吉か手妻目を驚す斗り也【かの久吉元手妻輕業

にて諸国わたりしか輕業にて子を殺し我も體をいため夫より髮結渡世

せしと云】藝妓政子蝦夷方言ソエクク

節をうたふ松山氏尺八にてこれを和す能子扇を取て】4㉗

舞其歌左に記す

「ヤイサマネナ クク ネコナカラ クク エロランケ ニシヤタ

コタンナ

ヲマンナ ソエクク チセカイ ヲシヨロライ コタンネハ

リカメノコ

アンナ チヨカイ ヲタライ アンナ ソエクク

拇戦やら踊るやら興不尽して亥之刻頃運上家（江）帰り

宿す同六日雪風午後晴運上家役人を以石原氏（江）昨

夜失礼を謝し已上刻出立磯谷旅館（江）帰る同七日

雪風此日七種之粥を食ハ日本の風也蝦夷地雪山

氷海にて青種得かたき故にや只白粥を食ふなり】4㉘

元日三日五日これを三日と云朝毎に若水屠蘇を汲

雑煮を食ふ元日より七日までを松之内と云夜毎クク

当濱の者運上家（江）集り博奕【源平と云】なすこれを禦（馴）する時ハ

他村（江）行金錢を失ふ故自古松の内はかり（二）運上家（二）而

許すと云午後石原権大主典松山使掌五島殿支配地引渡

のため来る附属ハ南木久吉藤田直堂也当藩も旧冬

仮證書にて請取置し故今般改而約定書を取かわし

無滞相濟【但後別（シリヘツ）川岸人家六軒人別三拾式人当支配と成】同  
八日雪風寒威強し

朝辰上刻松山使掌山田惣轄立合にて五島殿支配所』5才

後別川堺見分境柱を建る午下刻戻る酒を出して役

人を謝す同九日雪風寒気甚し石原氏滞留楠元少

主典止宿になる同十日雪風石原氏歌棄江帰る申下刻萩野

使掌約定書持来る

約定

歌棄磯谷両郡之領海におゐて雙方追鯉

取揚げ候節ハ其税都而是迄之通相心得

積回し且海鼠鮑昆布之儀も漁人入交り

融通前条に齎しく可致候也』5才

明治三年 正月

米沢藩士 山田民弥 殿

右に同じ書物を当藩よりも差出す同十三日晴

運上家にて海雀を獲

形ち千鳥に似たり同

十四日晴一点の雲なし

此日乙年越また子持越年

とも云当地子兒數十人 『下部挿絵』6才

面体を墨或ハ

紅粉にて粧ひ

コアイホウ（御祝棒なる歌）とて

一握程の木を

削り女子有  
家毎に群り

入かの棒にて

女の尻を突

立る其囃子有 『下部挿絵』6才

「年に一度御祝ひ三度よい産子か出来るッ」

【日本の粥杖なるか】同十五日雪風午後土人を呼出し年始の

いわゐとして酒を賜ふ惣乙名エ、サク脇乙名スエト

小使シイタサ三人列坐左に通辞岩蔵右に用達代利

惣次酒器の飾り旧冬初対面の節に同しエ、サク出立ハ

萌黄のシヤランヘアミヒに赤地金欄之陣羽織を着す

スイトハ茶色のシヤランヘアミシに赤地金欄の陣羽

織シエタサハ美唐草を染なしたる衣に猩々緋の陣

羽織なり酒を飲には盃をいた、き髭あけをもつて』7才

一番に氏神（義経大明神） 二番に火神三番に水神龍神江

手向け大狐を祈り取後一息に吞なり彼スエト大に

酔て手打て歌を唱ふ文句一切分らねともおもしろし

また立て両手にて胸を打踊るこれ又奇にして

おもしろし運上家（ヤ） 勝手に退き終日歌つ舞つ或ハ浄

瑠理を語る同十六日雪風寒気強し岩内熊野、

神職二人函館修験不動院運上家に来り新年の拂（應）

とて笛鼓にてはやし舞をなす同十九日中朝汐干二而

弁天島（カモイシリ） 江行き咆海苔獲る昼運上家より初鯉を』7才

『8才挿絵』

献す【東海岸鷺ノ木辺ニテ

取し魚成よし冬鱒と云】至而美味也酉ノ下刻吉田氏壽津(スツ)

より蟹の大なるを持来る(ニ尺余) 同廿日微雪松前より

佐藤栄右衛門手代【善兵衛好兵衛】当地江出張同廿四日晴海波穩か也

小舟を浮め飛鳥を廻り弁天島江つきヒヨリ貝(又似タリ貝トモ云) 海苔を

取る此日吉田氏山田氏歌棄石原氏江行巡見御用之

達しを請先触をもらひ来る

先触

一人足三人

右米澤藩山田民弥外三人地理研究地質点』8㉞

檢之素志聞届後志国磯谷郡より石狩国石狩

郡まで巡見御用申渡今月廿九日發足其筋

通行候条止宿賄代其外等御定賃錢請取之

都而無差間様可取計候也

午正月廿三日

磯谷より石狩まで 本陣役人中

歌棄郡開拓使出張所 印

同二十五日晴申下刻より曇り夜中雪風朝辰之刻

岩内知恵光寺以使僧伺ニ出る此日土人エ、サク後

別山にて熊を獵せし肉を献す味ひかろく』9㉞

兎肉の如し熊とハ食へぬもの也【白羆なる獸又魚を食ふ故か】同六日中

午後曇此日山田惣轄吉田氏予三人常吉を案内

として石狩(イシカリ) 国本府迄地理研究のため磯谷を發す

【常吉ハ運上屋番人也

元秋田辺のもの成か】于時辰之中刻也自本陣柳屋光兵衛并

同所小遣容作後別川境迄送るノツト五島殿旅宿

江立寄休息【但重役坂口七郎老人当地江残り

余の人数ハ明後八日出立東京江上ると云】ノツト坂を越へ

後別川渡場小休【川ハ氷の上を

往來する也】正津川(シヨラスカワ)【戸数四】是より名にあふ

雷電(ライテン) 山道也【夏道ハ濱詰より上りヤフシタ江出

湯本江出る也】麓より峯迄

真直(マッスク) につけし道ニ而階子を上るか如し山の八分目にて』9㉞

英吉利人スコットに出合【此者岩内石炭山の鍛冶なり此度

御暇にて函館江帰る也妾三人内壹人

子を産ミ自ら負て来る有貌容スコットに

髻髷たり妾ハ皆岩内の遊女なり】辛ふして登り詰

見かへれハ磯谷(イソヤ) 歌棄(ウタシ) 壽津(スツ) 島牧(シマコマキ) また南に

カヤハ 昆布

山(コンホノホリ) 畫か如く絶景也下り坂けわしく難下樅の枝

尻に布きすへり落漸く湯の俗(ユノタ) に至る【温泉有蝦夷緑磐の氣ヲ変

自岩内出(テ) 張の

通行屋耆軒有】此處にて昼餉場所出機(テカセキ) の男女四拾五六人

休息して有【出機とハ南部津輕松前江刺(エサシ) 辺の百姓蝦夷鱒漁場江

年々雇れ行を云男ハ漁女か飯炊また美目よき女ハ

賣色小兒ハ子守あるひハ小遣彼給錢ハ三四五の三ヶ月間に男三拾兩

女式拾兩位余ハ働次第五拾拾兩も得て

国に帰ると云正月の末より二月の末まで日々千人余も通る也】これよ

り』10†

〔10†挿絵〕

登り坂増々けわしく鼻をする如く絶頂より弁慶（ヘンケイ）

刀掛（カタナカケ） ウエントマリ景色よろし拾四五丁下り熊野岱（クマノタイ）

【熊野堂別当有】 沓里余山を下り岩内（イワナイ） 駅【戸数二百四五十旅籠

屋妓楼あり

にきわふところなり土人四十人】

右に硫黄山有峯より煙り立見ゆ申ノ下刻本陣

【元運上家請負人ハ松前

千本屋二左衛門と云】止宿【自磯谷七里】同七日晴折々微雪早朝当

地出張開拓役人柴田権大主典（カヤヌ） 三面會し萱沼（カヤヌ） 石炭山見分

いたし度由伺しに早束承引萱沼（カヤヌ） 出張鈴木権少主典（江）

手紙を認むかの一封を得て人足を案内として岩内

本陣を發し海辺（江） 出つ此辺波高く破舟多く』11†

ゆりあけ甚見苦し、シリフカ川【幅三十間程】舟渡【当時水上を渡る】

彼渡守江立寄昼餉此處（二） 而耳に環首に玉をかけ

たる女子（ヌメ） を見る自是断岸にて海辺往来なりかたく

山道にかゝる坂極急にしてあふなし漸く這上り

此辺萱山なり海風烈しく萱の葉糸の如くに

さけ美事也半里行程チヤツチナイ【戸数五六】舟漕（船） よろし

鮮嶺岩内一の處と云此辺より雷電山岩内ニヘシ岳

後志山絶景也又萱山を越へ拾丁程にて渋井（シライ） 【番屋沓軒有】

に至る又一山を越へ萱沼（カヤヌ） に至る【戸数七八】石炭役所を』11†

尋ね鈴木権少主典（江） 面談し岩内よりの手紙を出し

けれハ為案内家来を指出す自是石炭山（江） 登り坑

中或ハ鉄車鉄道の仕掛見分し細かに尋ね聞

しかとも愚にして覚えかたし大略左に記す

一 石炭坑ハ萱沼（カヤヌ） 山右第一の沢山の半腹にて（テ） 新古の

両坑有古坑ハ山之背面にて舊幕之臣長谷川義

三郎歌棄詰たりし時開之其後慶應丁卯村上次郎

太郎英人イラスムス【コンシールの弟也】を頼み彼山色を見せしむ

眼鏡を仕掛土中を照し見て海中二里程沖迄悉く』12†

〔12†挿絵（巴車・牛雪舟・小車・大車・一輪車）

石炭にて極上品なりと云於是立文大夫塚本丈四郎を

奉行として山の正面より鑿之今の坑これより

坑より海岸迄二拾六丁か間材木を縦横に布き【彼材木は皆

後別より切出し筏に

くミ持来りしと云】鉄の延金を張り車道をつくり四輪の

鉄車を以て石炭を運送す山坂峻なる処は

坂の上に巴車を仕掛け石炭を小車に積【目方一トン入りなり一トンとハ

二百六十貫八百目を云也】繩を以ておろしかのおもりにて下より空（矢）

引上す仕掛はねつるへの如き機也平道（三） 出れハ

大車【目方四トン入】に積て濱辺送るなり車上にハ御者』13†

宍人有機を踏楯を取れハ車自らうこき次第に強く

わしり早きコト矢の如し【但車道に小石沓ツ有ても車忽ち

覆る故車道之往来を禁すもし

犯すものハ刑罪にて

行ふと云禁札所々に有】暫時にして海岸（江） 至り石炭を下せハ

空車になり重りなき故にや車獨り走らす

よつて牛に引せて又山<sup>江</sup>上すなり【但石炭をつミ下す時  
彼牛を車にのせて

ゆくなり】彼車の職人ハ昨日雷電にて逢し英人スコット  
なりと云当今ハ日本の職人諸道具の細工よく覚へ

数十人異人装束にて働さま中にも鍛冶之働など甚

奇なり又数千貫目も掛る秤の仕掛有中々見極め難し』14f

坑中ハ金坑の如く鳥居を建て【深サ六四五間程】中ハ蜂

巢の如くに鑿り火薬にて岩を砕き大なる吸

揚を仕掛水を抜き【彼仕掛蒸気船にて海底

より水を取機に同し歟】機人三拾

式人之内二拾人掘方多拾式人ハずり出し【壱人之働一トン宛と云】

坑中火薬の煙りに岩炭の粉混和しいきも鼻も

つかれすかろふして敷内を出各面を見合すれハ

肌理に石炭入り鳥の如し惣而此辺住居のもの

婦女子また白狗に至る迄皆真黒にて崑崙人の

如し可笑さま也当村濱役嘉平<sup>江</sup>宿す于時申下刻也』14f

【自岩内七リ】夜中濁酒をのミ石炭の気を拂ひ休ミぬ【按するに石炭  
には与石の気変有にや壙中に入れハ呼吸詰り息苦しく必肺病を起すへ  
し

坑中の機人炭末眼中に入病目のもの多し何れ彼地のもの長命は覺束な  
し】

同八日晴至而暖也已上刻出立シリフカ川小休此辺より後別<sup>シリヘツ</sup>

山絶景也午下刻岩内本陣<sup>江</sup>着す申下刻歌棄詰萩野

使掌本府<sup>江</sup>出張とて同宿す夜中柴田氏宿所<sup>江</sup>行

三浦権少主典外<sup>二</sup>使掌二人ともに酒宴をなし戌下刻旅

宿<sup>江</sup>帰る彼柴田氏元肥前藩言語少しも不分甚氣

之毒なり詰藩役人にも多く出會しかとも斯る人にハ

はしめて也と大笑しつ同九日晴申上刻より曇る朝』15f

辰ノ刻出立町はつれより凌々<sup>凌々</sup>たる野原也一里半程行

ソツコナイ是より大木立【檜樺の類多し】マケシ沢【戸数二】中の小

屋<sup>チカノコヤ</sup>【戸数二】シノ

ナイ是より後別山見ゆる御手作場<sup>ヲテサク</sup>【先年左幕<sup>當</sup>見某開之】

戸数五六軒

休息すへしシリフカ川舟渡し【巾三四間】通行家昼餉【岩内本陣

よりの出陣也笹小屋とも云】エウトロメムクルニルイカ【戸数一】

木幣峠<sup>エナヲトマケ</sup>登り口より

見かへれハ岩内硫黄山見ゆる絶頂より煙立登るなり

峠の上に茶屋有甘酒の名物也左境柱あり従是北

石狩<sup>イシカリ</sup>持【以下雪にうつもれて不見】此辺より与市<sup>ヨイチ</sup>濱増毛<sup>マ</sup>

シケヲヒヨウ

岬見ゆる東北に与市<sup>ヨイチ</sup>岳峨々たる高山也一里斗』15f

下り通行屋泊【自与市の出陣也岩内より八里】于時申下刻也同十日大

雪

辰上刻出立ルヘシへ【戸数二】ヤス川シカリヘツ昼餉これより与市<sup>ヨイチ</sup>

川に添て山の腰を通る也秋味多しワラヒライ七曲<sup>チマカリ</sup>峠々

の下【戸数一】与市沢町一二三四丁目旅籠屋遊女多し【蝦夷地にて

遊女のコトを厂的字と云むかし一夜花代式百文なりし時の名也

式百文の銭を拂て八厂的字形ちに似たり迎かく呼しと云又娥の字とも書す】エモシ岬

景色よろし彼岬を廻れ八本陣也【竹屋辰右衛門と云】戸数二百余土人

三百人程与市川【巾三十九間】舟渡【当時水上を渉る】上与市【カミヨイチ

濱中【ハマナカ】一里

にしてフンコへ山を越ウムシマナイ【戸十八】又山を越へ忍路【ラシヨロ

本陣<sup>江</sup>

泊【西川某と云】申下刻也【自通行屋八リ】此日初午にて所々稻荷祭

礼有】16<sup>付</sup>

賑ふ也濱辺の小兒五色の紙にて旗を作り正一位

稻荷大明神奉祈大漁と記せしを持群遊なり

同十一日晴辰上刻出立土人家多しツコタン【戸四五】ホンツコタン

絶壁の下を通る處有ワシルと云波高之節ハ往来不成

山を越て道あり桃内【モ、ナイ】【戸数十七八】シホヤ岬絶景也小山を越へ

塩屋【シホセ】【戸数六七十】土人多し町はつれにて小休是より山中越壹里

半程行境柱有従是東兵部省支配地イナヲ沢【戸数二】小休

また山を越へ手宮【テミセ】に至り本陣昼餉【自高島【タカシマ】出陣也当時

假海官所と成】

戸数三拾程高島【タカシマ】岬とチャラチナイと相對して湾をなし】16<sup>付</sup>

少しも風あたらす舟澗極よろし北海道四港の一なり

【四港と八手宮【テミセ】函館【ハコタテ】壽津【スツ】幌泉【ホロイツミ】泊舟拾艘

程見ゆこれより左の小山を

越せは高島【タカシマ】也【高島ハ往来に非らず】東に遠く石狩アツタ山

コカネ山

見ゆる景色よろしユマサンナイイロナイ此辺家續也

所々に鋒立岩【ハカサ】小樽内【シタルナイ】【本名クツタルウシといふ小樽

内とハ五里程先の川の名也】

蝦夷西岸第一之繁華也人家四百余シンチ町コクタ町

旅籠や多し三階の大妓楼数軒有此處<sup>ニ</sup>而始て

粉壁瓦屋朱欄を見る諸商人漁も又多し【自本陣之

案内にて】大坂屋某泊未下刻也自忍路【ラシヨロ】四里同十二日朝微雪】17<sup>付</sup>

【17<sup>付</sup>挿絵・狂詩】

晴已上刻出立カツチナイ川橋有【水色アカシ】山を越へクマウシ【戸

数式十】ア

ツウシナイ小川マサリアサリ此辺人家多しカモイコタン絶壁

の下を通る也ケンカトマリ此日札幌【サッホロ】府管【フワン】轄島判官殿<sup>ニ</sup>

出合【此度東京<sup>江</sup>御用左<sup>ニ</sup>付出張之由年頃四拾五六と見ゆ髭長く

いやしからぬ人物なり元肥前藩なるよし】

上下式拾人程荷送りの人足数十人悉く土人<sup>ニ</sup>而額に

黥したるも有耳環をかけたるもあり何れも鮫の如者共

群れ行さま美に目さましくフンツカハルウス断崖絶壁

の下に石門有彼中を通行する也【五間三尺】チャラチナイ

右に幟有左に島有此辺第一の景地なりヲタシユツ人家】18<sup>付</sup>

多し銭函【セニハコ】本陣泊未上刻也【自小樽【シタルナイ】四リ】此辺本府に

近き

故役員【イシ】或ハ諸藩の通行多く飯早食物尽て大根

壳本八百式拾四文之由夜中蒲団薄く眠り難し

同十三日晴辰上刻出立町中程右に札幌(サツホロ) ユウフツ越

道追分有町はつれより石狩(イシカリ) 迤五里か間砂濱にて往来

よろし銭函(ゼニハコ) より二里斗ゆき川有小樽内(ウツルナイ) と云【戸数二】

此處

小休し又一里程行濱中(ハマナカ) 【戸数二】昼餉食物何もなし是より

馬に乗石狩(イシカリ) 迤半時にして至る本陣に泊す申上刻也

戸数百余蝦夷第一鮭獵場也石狩川幅二百三拾間<sup>19</sup>

大獵の節ハ一網に鮭魚百束百式拾束位取ると云【但し一束とハ

鮭百式十本といふ】昨年ハ至而不獵のよしなれとも大船七拾艘<sup>ニ</sup>積

【三百石より千石迄の船也】内地(シヤモチ) (日本) 江送りしと云運上屋にて

土人(アイヌ) より鮭買上る

直段ハ老本錢八文宛成よし此川上千年(チトセ) 辺江(ニ) 取し鮭ハ

品悪き故一本四文ツ、のよし【此直段昔よりの定直にて運上屋<sup>ニ</sup>而

土人<sup>江</sup>諸品を賣にも左の如くにて

米老舛五拾文木綿老尋式百文

酒老舛式百文なりと云【かの本陣の番人柴沢と云もの有

元羽州山形三日町のもの<sup>ニ</sup>而二三年前此地<sup>江</sup>来しと云

隣国の者故なつかしく終日はなしあふ同十四日晴折々

微雪辰上刻出立石狩川氷上を拾四五丁涉り岡<sup>ニ</sup> 19

上り林を行コト二拾丁斗にしてマクンヘツ土人家あり

七八寸斗なる小兒耳環首に百文銭四文銭をかけたるか遊ひ

居たり又氷上を渡りしに所々にひ、われ有気味悪し

乍去氷の厚<sup>サ</sup>三四尺もあるへし是より次第に深々たる

古木林甚密なり二里余にして篠路(シノロ) 【戸数二十】嘉平次と

いふもの、家にて昼餉此者奥州白川郡米村の百姓なり

此もの、弟清太郎拾年以前<sup>ニ</sup>彼地を見立小家を補理

田畑を開しより追々人家も出来今ハ田五六反畑二三十

反もありと云畑ハ大豆小豆粟黍蕎麦よく出ると云<sup>20</sup>

〔20<sup>才</sup>挿絵〕

田ハ三年に一度位あた、かなる年にハ実のるといふ爾し

稲の節ハ三伏に成かね二伏にて八月の末に穂出一反

より老俵(ウラ) 位も揚るといふ不作すれハ種尽て明年

また植へかたく甚迷惑なりと云是より又大木立の中を

行コト二里余にして札幌(サツホロ) 村【戸数二十程】此辺の林ハ松樺楡柳

桜胡桃桑黄檗草ハ蓬野菊大なるもの老丈五六尺太<sup>サ</sup>一握に

あまる又半里程<sup>ニ</sup>而本府に至る此辺切開取中にて伐

木の聲四方に響き一里余も開きしと見ゆ南の方

山手に添て集議局をたて町割屋敷割の杭を立<sup>21</sup>

雪を掘地形をため家作するも有数百も人足或ハ

大工鍛冶大なる茅小屋をかけ其混雑(サシ) 筆紙に尽し

かたし役宅(タシ) 旅籠屋取合拾二三軒も出来たり

此七月までに人家二千軒も出るよし此地東北に

開け平地六拾里程幅五里より二拾里位まで有といふ

皆大木立なり中にハ谷地野原抔も有よし後年

能く開けなハ東京にも劣るましき平地なるへし

本陣<sup>江</sup>泊【白石狩五リ】申中刻也夜中炭もなく夜具も

なく漸く敷蒲團を冠り臥せしかとも寒氣烈敷<sup>22</sup>

眠りかたく夜半より起上り焚火にて夜を明しぬ

【磯谷寒中の位なる氣候なり】同十五日晴卯之上刻出立又林の中を  
一里程行コトニ【戸数五六】又四五丁行へツカウスへ小家老軒有  
しか先達而焼失せり畑少々有よし半里程行追分

右ハハツシャブ左ハ銭函（モニハコ）道也是より山の腰を通り二里余  
にしてホシホツケ炭焼小屋有昼餉す食物一切なく本陣  
より送りし握飯江塩をかけ漸く飢を凌ぎ二里余ニ而

銭函江出而本陣に泊未下刻也【自札幌七リ】夜中当地出

張之病院二等醫師平帰一を尋ぬ【此もの元米沢下長井荒砥之ものニ而  
永く東京に有て専ら西洋学を励ミ砲術家下曾根氏に食客となり

其後加納藩となる此春蝦夷開拓ニ付二等醫師拜命昨年七月中当地  
出張のよし】いろ々々饗應に預り夜の更るを忘る此宿の  
娘酌に出て津軽方言歌を唱ふ

「ヲカコ モツコ ケセ チヤツキト ケラシテ コイセンネイ

ナクハヨコヘス

イマシニケイセ サアッ

譯 おつかさん餅をおくれ サツハリきらしておさりません

なくはよこさんす 後におくれ

戊申刻旅舎に帰る同六日朝曇雨降午後晴辰下刻

出立未上刻小樽内仙鶴樓に泊此辺會津降伏人』<sup>23f</sup>

数百人住居【一日に米壹舁錢二百文ツ給わるも諸品高價ニ而中々以

取續かたきよし雪舟引米搗又八人足杯ニ一刀を帶せ  
しもの多く出合しか

必降伏人ならん】同十七日辰申刻出立晴風烈し此日より

彼岸にて濱辺のもの漁舟を出し鮭漁の支度をする

なりシヲヤ昼餉申下刻与市本陣泊同十八日非常の雪風

山道越かたく滞留す同十九日晴朝微雪卯下刻出立シカ  
リへツ昼餉未下刻与市通行家泊同廿日雪風辰下刻出立

エナヲ峠茶屋ニ而甘酒を飲ミ寒飢を凌ぎ暫く休息し

岩内笹小屋昼餉未下刻岩内旅籠屋「三店泊同二十一日微

雪風烈し辰上刻出立雷電熊の別当小休湯本昼餉』<sup>23f</sup>

後別渡守小休此處まで自本陣榊屋好兵衛并濱役

土人スイト出迎ふノツト濱役家にて小休未中刻磯谷役宅へ

着自本陣元請負人佐藤栄右衛門をはじめ諸役人前濱まで

出迎す【但シ佐藤栄七より此度本府江歎願筋有之

出張之処當時判官殿上京留主故暫く磯谷滞留のよし】互ニ道中無

難を怡ひ酒宴をなす此日歌棄詰役人より廻状馳来左

之通

岩村判官殿西地場所々々御巡見として小樽詰

権少主典菅原鋭次郎御附添近々御出立ニ付

其御持場内御備品（シ）戸籍其外一村限り取調書』<sup>24f</sup>

并繪図面共兼而御取捨置御通行先御旅邸江御差出

可有之候

一同断ニ付詰場所役人之内吾人御案内として御出張可有

之候尤見込御申立筋有之候節其所詰合官長罷出

事實御申立可有之候右之段申進候也

開拓使 庶務掛 印

山越内 歌棄 磯谷 岩内 余市 小樽

右御詰合中

右承知之上早東以飛脚岩内<sup>江</sup>送る同二十二日曇天微雨<sup>24</sup>

終日休息同二十八日中波高し自函館小樽内<sup>江</sup>御雇人足

三百五拾人通行の先触来る【降伏なる歎】同廿九日岩村判官止

宿三月二日中山田惣轄五島殿内坂口七郎予三人歌棄詰

石原権大主典<sup>江</sup>罷越境界見分之コトを談す尾崎権少主典

【此人會津降伏小樽内住居之処今般開拓権少主典被

命歌棄詰となる歌俳をよく達せしもの也】松山使掌来り共ニ酒宴

を為す夜戌之刻頃本陣<sup>江</sup>帰り宿す同三日朝曇午後雨天

松山使掌并歌棄 磯谷両哥之百姓小頭立合にてユウキナイ

山手境柱を建る松山同道して磯谷本陣<sup>江</sup>帰る夜中

自国許交替之先触来る各蘇生せし心地して怡の<sup>25</sup>

酒を飲ミ安眠す同四日朝曇次第に晴れ松山氏山田

惣轄坂口氏予四人番人常吉土人スイトを案内として

後別川上<sup>江</sup>發す于時辰中刻也ノツトより小頭惣兵衛

五島領正津川<sup>江</sup>より小頭多三郎外ニ人足六人を雇ひ後別

川口にて休息昼餉する内舟の用意も出来第一番舟

【ホツチ舟】松山使掌山田惣轄予土人スイト小頭惣兵衛第二舟

【筏舟】坂口氏小頭多三郎第三舟【筏舟】米味噌鍋筵を積

出舟する時巳中刻也川幅八拾間余有水漲り宛

海の如し右平山左平野三四丁にして右に働小屋<sup>25</sup>

壹軒有畑少々有左リエフトンナイ働小屋有右ヨツラシナイ沢有

雑木山なり右ハツサキ沢小川有

ハツサキ沢両岸柳多し

ノタヘツ内名大曲リ<sup>江</sup>と云

右小川有左右木賊

多し松山氏此辺<sup>三</sup>而

鴨壹羽獲る【鉄砲にて】左<sup>三</sup>

家壹軒有畑少々あり

吉松と云もの住す停船 【下部挿絵】<sup>26</sup>

〔26〕絵地図

暫く休息す此辺内名<sup>江</sup>長瀨<sup>江</sup>といふ右へチワンナイ沢小川

有東<sup>三</sup>

遠く後別山見ゆる右ニイヘツナイ沢有左に鮭獵小屋有

左リワイトンナイ小川有内名シメチャ川と云【此処昔しシメチャと云

土人住せし頃名つくといふ】

左右山より山道一里余も平地大木立也山にハ樅雑木多し

右カヤヌマナイ小川有フリタシナイ小川此辺より辰巳に

開けし大沢にて古木多く山不見土色少し赤く畑に

開きよからんかと思わる左リヲサンナイ小川働小屋有【木樵の小家也】

右フルシヤツナイ左リホロムイ川沼有内名沼の沢<sup>江</sup>と云【自川

口舟路三里余】

働小屋七八軒有彼川に舟を漕入れ両岸柳多し雪中<sup>27</sup>

なれとも柳の華咲き絶景也舟をつなき上陸し笹小屋<sup>江</sup>

入一泊す夜中燃火に当り例の松山氏か浮世はなしにて

夜を明し同五日卯下刻出舟す中泊<sup>江</sup> 渚有ウエンナイ

渚とも云右イカルシナイ沢小川有左シヨウフシナイ小川有此辺

内名<sup>江</sup>トキカラと云此日曇天なれとも次第に晴れ後

別山正面に見え左リに岩内嶽有景色いわん方なし

左リヲイタルシナイ小川内名氷水（ヒヤミツ）と云舟を（フネ）岸に繋ぎ

暫く休息し繩を以水底を量り見るに二丈六尺余有

此辺より急流なり川中に小島有ハンメクシナイ川あり』28才

獵小屋有松山氏土人スイト鹿の足跡有逆岡に上り隠

鉄砲を以て追かけゆく左右林甚密也ヘンケメクシナイ中川也

是より川二ツに分れ又メナにて出合なり極急流にして

所々にフイラと云有難所也『フイラとハ昔し土人鮭獵の為網代を作り

たる跡なるかと松浦か日誌にも見えたり

今見るに網代跡に相違なくおもわる

スイトに尋ぬれハ只フイラ（フイラ）と斗リ云『舟士等赤禪（サカサネ）かに成り汗を流し

棹を張りかの逆流をこき上るに坂口氏の舟棹折れて

已に危かりしか漸く柳に取付辛ふしてメナ川に至る

松山氏スイトに出合互に無事を怡ひ獵小屋に入

昼餉すメナ川『巾二三間』此川西南に向ふ鮭獵多き場所也と』28才

【自沼沢（ヌマザウ）三リヨ】是より昆保（コンホ）迄ハます（マ）急流にて難義

のよし

四五月頃天気を見合せ丸木舟を造りゆけハ至るによし

と云当時春水漲り難至是より戻る未中刻より東風

起り追風故手鑓に毛團を張り帆となすに舟早き

こと矢の如く暫時にして川口に至るノツト岬を廻り海（ウミ）

出小頭惣兵衛か前濱（マエハマ）着船す于時申中刻也舟路七里

程但寒中氷上をわたり堅雪を踏真直にゆけハ三里

位のよし暫く休息し磯谷旅館（イソカ）帰る同六日雨

風ミそれ雪中中刻頃為交代南雲琢蔵黒崎』29才

〔29才挿絵〕

養助永井清左衛門中野橋郎外（ト）下役壱人夫方壱人

メ六人着す互に無事を悦び酒宴をなす同十二日

中五島殿内坂口七郎来る【此人発句をよくす

俳名を專一と云】送別の句

左にしるす

故郷に戻り給ふとて 大人方の旅よそほい

なし給ふは若木ものひ行 弥生の月に

なんいと芽出たし

美山（ミヤマ）しはる（シ）の錦（ニシキ）を着る人そ

折（マ）から自言し給ハん事を折る』30才

守り給へくさ木もゆるむ弥生空

專一（せんいつ）拝草（はいそう）

同十三日中天旅装して暇を告げすみなれし

磯谷を發し歌棄本陣昼餉石原権大主典松山

使掌ともに離盃を汲ミ石原氏送別の詩有

踏雪来他国 截花帰故郷 天機着車

軸 相會對離觴

漁村（いしむら）拝草（はいそう）

米沢盟兄』30才

